

蔵訳『阿闍世王経』第Ⅳ章訳注研究

宮崎展昌

はじめに

昨年度に公表した拙稿「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅱ章訳注研究」(『真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97; 以下「前稿」と略称)に引き続かたちで、本稿では同経第Ⅳ章について蔵訳にもとづく訳注研究を提示する¹。

〈阿闍世王経〉(**Ajātaśatrukaukṛtya(prati)vinodana*)の主要部分は、第Ⅴ章から第Ⅹ章で展開される、阿闍世王(**Ajātaśatru*)の抱える後悔の念(**kaukṛtya*)を解消する(**vinodana*)物語である。一方、その主要部分より前の第Ⅰ章から第Ⅳ章は、いわゆる「序分」に相当し、本稿で扱う第Ⅳ章はその最後を飾る章である。

竺法護訳では「幼童品」と題されるように、第Ⅳ章は、その末尾部分を除いて、大半は過去世における3人の童子に関する物語となっている²。すなわち、その過去世物語は釈尊と舍利弗・目犍連の2大声聞の前生譚であり、過去世に無上正等覚に対して発心していたか否かで、未来世において仏となるか、大声聞になるかが異なることを示す物語になっている。

1 前稿でも注記したように、訳者は現在〈阿闍世王経〉全体にわたる蔵訳の批判校訂版とそれにもとづく訳注研究および諸訳対照本の公表にむけて準備している。それに先行して、同経の各部分について、蔵訳からの訳注研究を試みに提示し、諸先学の御批正を仰ぎたい。

2 〈阿闍世王経〉全体の構成・梗概については、拙著[2012: 32ff]参照のこと。章分けについては、拙著[2012]や前稿同様、竺法護訳『普超三昧経』にみられる分品を借用する。一方、支識訳『阿闍世王経』を現代語訳した定方[1989]では、章は設けずに、定方氏による独自の分節がなされている。本稿で扱う第Ⅳ章は同書では第11節に相当する。

第IV章をめぐる編纂事情について

拙著 [2012: 69-75] でも論じたように、末尾の §12 をのぞいて、第IV章の大半は、元来は独立した単行典籍であったもの、あるいは外部に素材として独立していたものを取り込んだ部分である可能性が高い、と訳者は想定している。その理由にあげられる点について、簡単にまとめて、以下に再掲しておく³。

- 釈尊が舍利弗に語りかける独白（モノローグ）の形式をとる。章全体のまとまった分量でそのような形式をとるのは、本経では第IV章のみに限られる。それに伴い、本経全体をとおして主要登場人物のひとりである文殊が一度も登場しない。
- §11 の末尾部分において、支識訳と竺法護訳にのみ、*mahāyāna-parivarta/ *mahāyāna-sūtra に対応する文言が確認できる。
- §8 での仏世尊の微笑にともなう奇瑞の記述が支識訳と竺法護訳では確認できない。それに対して、第XII章での同様の記述に関しては全てのヴァージョンに確認できる。

一方、第IV章末尾の §12 については、一部の記述が第V章以降の記述と矛盾するものになっているものの、その前後の部分を巧みに接続する役割を果たしている⁴。

なお、前稿で指摘したような、法天訳のみにみられ、その翻訳過程で加えられたであろう意図的な改変の痕跡については、第IV章では際立ったものは見当たらない。

3 拙著 [2012] では、もう一つの論拠として「登場人物に関する矛盾点」を挙げている。しかしながら、本訳注（注28）で指摘するように、その原語の比定を誤っていたことがあきらかになったので、謹んでそれを訂正するとともにここでは言及しない。

4 詳しくは拙著 [2012: 72ff] 参照。

訳注の方針

本稿でも、前稿の方針を基本的に踏襲するが、便宜上ここでも再掲しておく。

前稿同様、本稿でも〈阿闍世王経〉の蔵訳テキストからの現代語訳を提示する。依拠する蔵訳テキストは筆者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本⁵とし、用いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同経の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定することを試みる。以下、その他の点について箇条書きで記す。

- 〔分節〕 訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所⁵で節に区切り、適当な見出しを付ける。
- 〔想定梵語〕 原則としてアスタリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、単語レベルのものは括弧内に想定梵語を記すのみとし、その典拠は割愛する。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠もあわせて注記する。
- 〔固有名〕 紙数の関係から、本稿では想定梵語からのカタカナ表記は初出時に示すのみとし、繰り返される場合は相当する漢訳語を借用するか一般に知られる漢訳名を用いることにする。
- 相当する現存漢訳諸本、特に支識訳および竺法護訳と蔵訳との間に注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも9世

5 現時点では、後出の略号表に掲げる16種の資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本を準備している。校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本カンギュルを底本とする。なお、第IV章に相当する箇所では、ゴンドラ写本とパタン写本に錯簡がみられた。また、プクタク写本については、そのカタログである Eimer [1993: 28] では35枚目のフォリオが欠損とされているが、筆者が用いたマイクロフィッシュでは33bおよび34aの撮影がなされていないようにみえる。詳しくは末尾の諸本対照表を参照のこと。一方、バスゴ写本の108枚目は他のフォリオとは筆跡が明らかに異なり、裏面には通常みられないような空白も多いため、後から補われたものとみられる。

紀頃に成立した蔵訳本に比べてかなり古く、系統を異にするとみられる上記両漢訳は、同経のより古い姿を探る上で貴重であり、それらの異同を詳細に調査し、記すことは極めて重要である。

略号および使用テキスト

- AsP *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: with Haribhadra's Commentary Called Āloka*, Vaidya, P. L. ed., the Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.
- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, Edgerton, F. ed., 1953. (Reprint: Rinsen Book, 1985)
- DKP *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra: A Critical Edition of the Tibetan Text (Recension A) Based on Eight Editions of the Kanjur and the Dunhuang Manuscript Fragment*, Harrison, P. ed., International Institute for Buddhist Studies, 1992.
- MVy *Mahāvīyūtpatti*, 榊亮三郎編著『梵蔵漢和四譯對校翻譯名義大集』1916-1925. (Reprint: 国書刊行会、1981)
- SP *Saddharmapuṇḍarīka*, Kern, H & Bunyiu Nanjio eds., Impr. de l'Académie impériale des sciences, 1912.
- T. 大正新修大蔵経

蔵訳〈阿闍世王経〉諸本⁶

- A タボ (Tabo) 寺写本 No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45, 47, 50-51, 53, 61, 61-75, 77-79b2. (第IV章

6 チベット大蔵経カンギユル諸本の〈阿闍世王経〉の情報については、ウィーン大学 Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies に置かれたプロジェクト The Tibetan Manuscripts Project Vienna (TMPV) が作成したデータベース The Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs; <https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php>; 2017年11月25日確認) を利用した。

は含まない)

| | | |
|-----|-----------------------------|---|
| B | ベルリン写本 | No. 224: mdo sde, Tsha 275b5-343a2. |
| Ba | バスゴ (Basgo) 写本 ⁷ | No. 49.2: Mdo, Nga 76a2-160b4. |
| Bth | バタン (Bathang) 写本 | No. 57: Pa 150a6-199b1. |
| D | デルゲ版 | No. 216: mdo sde, Tsha 211b2-268b7. |
| G | ゴーンドラ (Gondhla) 写本 | No. 26,01: Ka1b-51a5 ⁸ . |
| He | ヘーミス (Hemis) 写本 (I) | No. 48.1: mdo, Nga 133-157a6. (第 X 章の途中より) |
| Hi | ヘーミス (Hemis) 写本 (II) | mdo, Nga 77-81, 91-92, 95, 100, 114-118, 148-152a1. (第 IV 章は含まない) |
| J | ジャンサタン (リタン) 版 | No. 159: mdo sde, Tsha 234b2-295a6. |
| L | ロンドン写本 | No. 166: mdo sde, Za 273a7-354a6. |
| N | ナルタン版 | No. 201: mdo sde, Ma 339a4-427b6. |
| P | 大谷北京版 | No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5-281a5. |
| Ph | プクタク (Phug brag) 写本 | No. 289: mdo sde, Ke 1b1-85b3. |
| S | トク宮 (Stog Palace) 写本 | No. 223: mdo sde, Za 266b7-351a7. |
| T | 東京写本 | No. 223: mdo sde, Za 247a8-321a8. |
| U | ウランバートル写本 | No. 272: mdo sde, Za 237b4-312b8. |

〈阿闍世王経〉漢訳諸本

【識】 支婁迦讖訳『阿闍世王経』(大正新修大蔵経 No. 626)

【護】 竺法護訳『普超三昧経』(大正新修大蔵経 No. 627)

7 前稿で扱った第 II 章に関して、末尾の一覧表で掲げたバスゴ写本 (Ba) のロケーションを誤って記していたので、ここに謹んで訂正させていただく。正しくは以下のとおり。

[第 II 章: バスゴ写本 (Ba)] §1 88b3-; §2: 88b7-; §3: 89a5-; §4: 89b3-; §5: 90b2-; §6: 90b5-; §7: 91a4-; §8: 92a1-; §9: 92a5-; §10: 92b2-; §11: 92b6-; §12: 93a5-b2

8 前稿では、〈阿闍世王経〉のゴーンドラ写本に関して誤った情報を提示していた。正しくは上記のとおりである。なお、前稿の末尾のロケーション表に関しては問題ない。

【天】 法天訳『未曾有正法経』（大正新修大藏経 No. 628）

参考文献

- Eimer, Helmut [1993] *Location List for the Texts in the Microfiche Edition of the Phug brag Kanjur: Compiled from the Microfiche Edition and Jampa Samten's Descriptive Catalogue*, International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.
- 梶山雄一他 [1980] 『八千頌般若経』（大乘仏典3、新訂版）中央公論社、東京。
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさと一仏と文殊の空のおしえ』人文書院、東京。
- 藤田宏達 [1977] 「仏の称号一十号論」、玉城康四郎博士還暦記念論集『仏の研究』、pp. 81-98、春秋社、東京
- 星 泉 [2016] 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。
- 松濤誠廉他 [1981] 『法華経2』（大乘仏典5、新訂版）中央公論社、東京。
- 宮崎展昌 [2012] 『阿闍世王経の研究』山喜房佛書林、東京。
- [2017] 「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅱ章訳注研究」『真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97。
- 村上真完校註 [1994] 「阿闍世王経」『阿闍世王経・文殊師利問経他』（新国訳大藏経9、文殊経典部1）pp. 36-89、249-350。

（本研究は JSPS 科研費 JP16K16694 の助成を受けたものである。）

【蔵訳『阿闍世王経』第Ⅳ章訳注】

第Ⅳ章 過去世における三童子の物語—釈尊と舍利弗、目犍連の前生⁹

§1 過去仏サルヴァービブー（一切勝）と優れた2人の声聞

そこで世尊は長老舍利弗におっしゃった。¹⁰

「舍利弗よ、直ちに涅槃に入ることを欲するものは無上正等覚にむけて発心すべきである。それはどうしてかという、舍利弗よ、ある衆生で、輪廻を恐れるが故に『無上正等覚にむけて発心せずに、声聞乗に住して声聞になろうとすべきである』と心中考えるところのそのものたちは依然として輪廻において輪廻しても、他の菩薩で、精進をそなえ、正等覚に住まうものたちが一切智者〔性〕¹¹を得るということを私は知っている。それはどうしてかという、舍利弗よ、過去世において、如来・阿羅漢・正等覚者サルヴァービブー（一切勝）¹²というもので、明行足（*vidyācaranāsampanna）・善¹³

9【護】巻中「幼童品第四」【天】卷第三、定方〔1989：63〕「第11節 三児の心ざし」

10 本稿の導入でも触れたように、以降§10の末尾に至るまで、釈尊が舍利弗に語りかけるという独白の形式で物語が展開する。特に訳文中に明記はしないが、本節以降、§10末尾まで釈尊による発言が続く。

11 蔵訳の *thams cad mkhyen pa* は通例「一切智者」（*sarvajña）の訳語として知られる（Cf. MVy 14 etc.）。本訳注でもそのように理解して問題のない箇所はそのままに訳出するが、この箇所ではそのまま「一切智者」とすることは難しく、通例 *thams cad mkhyen pa nyid* などと訳出されることの多い *sarvajñātā/*sarvajñatva（一切智者性、一切智者であること）をその原語と想定して訳出する。

12 蔵訳と【天】では単に「過去世」とするが、【識】では「以過去無央数、不可計阿僧祇劫」とし、【護】では「乃往久遠過去世時不可計会、不可思議、無央数劫」とし、共に「無数カルバ前の過去」としている。

13 *thams cad zil gyis gnon pa*: *Sarvābhīhū (Cf. MVy 852) 【識】「一切度」【護】「一切達」【天】「具足功德」「具諸功德」

BHSD s.v.によれば、*Sarvābhīhūという名は *Mahāvastu* では釈尊に授記を与えた過去仏とされる一方、*Lalitavistara* や *Divyāvadāna* などでは燃灯仏のあとに現れる過去仏とされている。なお、拙著〔2012：49, 69ff〕では、第Ⅳ章に登場するこの過去仏の名称を *Sarvābhīhāvāna と比定していたが、管見の限り、そのような名称は辞書にも登録されておらず、用例も見いだせないの、それを訂正して上記のように比定する。

逝 (*sugata)・世間解 (*lokavit)・調御丈夫 (*puruṣadamyasārathi)・無上士 (*anuttara)・天人師 (*devamanuṣyāṇām śāstā)・仏世尊¹⁴が世間に現れていた。すなわち、舎利弗よ、その如來の聲聞は百千¹⁵コーテイであった。壽命は十¹⁶万歳であった。舎利弗よ、その如來の聲聞で優れたもので、智慧をそなえたものは、比丘アビウドガタ (超出¹⁷) と呼ばれるものであった。〔その如來の〕聲聞で第二に優れたもので、神通をそなえることに優れたものは、マハーヴェーガ (迅速¹⁸) と呼ばれるものであった]

§2 托鉢に出かける如來と聲聞たち

「そこで、舎利弗よ、彼の如來は、早い時刻に (*pūrvāhṇakāle)、內衣 (*nivāsana) を着て、袈裟と鉢を持ち、比丘サンガにともなわれて、キールティマツト (ヤシャスヴァツト)²⁰ と呼ばれる王城に托鉢のために赴かれた。その時、如來の右側には (*pradakṣiṇe) 智慧をそなえることに優れた聲聞が進んだ。〔如來の〕左側には神通をそなえることに優れた聲聞が進んだ。〔如來の〕背後には多聞のものが進んだ。〔如來の〕前には八千の菩薩が進んだ。すなわち、あるものは梵天の姿、あるものはシャクラの姿、あるも

14 いわゆる「十仏名」が列挙されるが、【識】では確認できない。また、上記では「調御丈夫 (*puruṣadamyasārathi)」と「無上士 (*anuttara)」で分割したが、藏訳では「無上なる調御丈夫」とも読むことができる。この2種の仏号については藤田 [1977] 参照。

15 【天】のみ、聲聞に加えて、「有八千菩薩衆」と造る。ただし、次節ではいずれの訳も「八千の菩薩」に言及する。

16 諸漢訳のうち、【天】では藏訳と同じく「十萬歳」となっているが、【識】と【護】ではともに「一萬歳」とする。

17 *mṅgon par 'phags pa*: *Abhyudgata (MVy 6388) 【識】「莫能勝」【護】「超殊」【天】「出現」 BHS D s.v. によれば、Abhyudgata という名称は *Gaṇḍavyūha* では仏の名称として言及されるようである。

18 *shugs chen po*: *Mahāvega 【識】「得大願」【護】「大達」【天】「迅疾」

19 【護】では、この箇所他に訳に見られない「興五濁世」という文言が挿入される。同訳ではサルヴァーピーブー如來の仏国土がいわゆる「淨土」ではなく、サハー世界同様の「濁世」とみなしていたと考えることができる。

20 *grags ldan*: *Kīrtimat (or *Yaśasvat) 【識】「常名聞」【護】「名聞物」【天】「妙音」

のは四天王の姿、あるものはデーヴァの姿でもって、道を清めることをしつつ進んだ」

§3 如来の来訪とそれに対する三童子の反応

「舍利弗よ、その時、彼の如来がその王城に赴かれると、素晴らしい装身具によって飾られた童子 (*bāla) 三人が道の真ん中で遊びながら座っていると、優れた如来で、清められた心を持ち、静まった感官をそなえ、静まった意を持ち、温和で、落ち着きに優れ、最上の境涯に到達し (*dam pa'i pha rol tu son pa: *paramapāramiprāpta*)、過失なく、制御された感官をそなえ、池のように清浄で、清らかであり、汚れなく、金で造られた祭祀の樹 (**yajñavṛkṣa*) のように広がり、きらびやかで、美しく、輝き、落ち着いておられ、大士の三十二相によって荘嚴された彼〔の仏〕が遠くからやって来られるのを、彼ら童子は見た。〔如来の一団がやって来られるのを〕見ると、ひとりの童子が〔他の〕2人の童子に次のように言った。

『童子よ、如来で、一切衆生のうちで最も優れたもので、無上の福田をそなえたものであり、デーヴァと世間にあるものにとっての布施されるべきもの (**dakṣiṇīya*) である彼がやって来られるのを、あなたた

21 この如来の背後に付き従ったものに関する記述については漢訳諸本で異なる。

【識】「有尊比丘名悔智，随仏後而侍之」(悔智という名の尊い比丘がいて、仏のあとに付き随った)

【護】「智慧博聞最殊勝者随従仏後」(智慧と博く聞くこと (=多聞) に最も優れたものが仏のあとに随った)

【天】「余声聞衆俱従仏後」(残りの声聞が仏のあとに付き随った)

【識】では固有有名を唯一挙げている。【護】がもっとも蔵訳と近いようだが、他本にはない「智慧」という文言が見える。

22 仏に関する形容の記述は蔵訳と【護】で近似する。それらに対して、【識】では如来に関する形容は「光明甚巍巍」のみであり、かなり簡潔な表現になっている。同時に、同訳では仏のみに対する形容ではなく、比丘や菩薩をも対象とした表現になっている。

23 【識】では一人の童子が、如来がやってくるのを見たことを他の2人に話しかけて、それに対して2人の童子も如来が見えたことを答える、という遣り取りがみえる。他の漢訳2種は蔵訳と同じく、以上のような童子の間での遣り取りはみえない。

ちは見たか。行こう。彼〔の如来〕に対して供養をなすべきである。

この〔如来〕に供養をすれば大いなる果報となるであろう』

そこで、その時、その童子は次のような偈頌を言った。²⁴

『この〔如来〕は一切衆生のなかで優れたものであり、

無上なる布施されるべきものである。

それゆえ、このものに対して供養しよう。

この〔如来〕への供養は大いなる果報となるであろう』

童子2人²⁵は言った。

『我々には華や香、粉香 (*cūrṇa)、塗香 (*vilepana/*upalena) はない。

世間において並ぶものなき人物である、

この〔如来〕に対して何をもって供養しようか』

§4 三童子はそれぞれの首飾りを如来に供養することを決める

「そこで、その童子は百千の値打ちがある真珠の胸の半飾り (*mu tig gi se mo do: *muktā-ardhahāra*) を右手でもって首から外して、次のような偈頌を言った。

『無上の福田である彼〔の如来〕にはこれをもって供養しよう。

この〔如来〕を見て、賢人たちのうちで誰が一体事物に対して執着するのか』

そこで、舍利弗よ、彼ら童子2人はその童子に倣って、各々の首から真珠の胸の半飾りを外して、次のような偈頌を言った。

『正等覚者で、流れを渡す者であり、

憂いを静め、解放された心を持ち、

無畏であり、正しき法に住するもの (=如来) に対して、

我々二人は供養をなそう』

24 本節以降の数節にあらわれる偈に関して、【讖】では偈の形式をとっていない。支婁迦讖が訳出した經典全般では、他本に偈頌がみられる場合でも長行となっている場合がほとんどである。

25 【護】では「第二幼童」とするが、【讖】では「其二兒」、【天】では「余二童子」とする。

§5 3 童子らの願望

「そこで、その童子は彼ら童子2人に次のように言った。

『童子よ、あなたたち2人はこの布施の法によってどのように願うのか』

そこで、〔2人のうちの〕童子1人は言った。²⁶

『私はこの世尊の左側の、智慧をそなえることに優れた彼〔の声聞〕のようになろう』

2人目の童子は言った。

『私は、この世尊の右側の、神通をそなえることに優れた彼〔の声聞〕のようになろう』

そこで、その童子は言った。²⁷

『私は、この如来・阿羅漢・正等覺者・一切智者で、一切を照らすもの、あらゆる方面を照らすもので、獅子の歩みのように進むこの〔如来〕のようになろう』

舍利弗よ、その童子が以上の言葉を言って間もなく、中空より八千の天子が「よきかな」という言葉を与えた。すなわち、

26 以下の童子たちの遣り取りは、【護】をのぞく諸訳では散文形式となっている。

【護】では最初の二人の発言については、大正蔵や磧砂蔵、嘉興蔵、鉄眼版では五字区切りの偈文として扱われているが、聖語蔵経巻や高麗蔵初雕本、同再雕本では改行や五字ごとの区切りはなされておらず、偈としては扱われていない。一方、最後の童子の発言については、【護】のいずれの資料でも五字区切りの偈として扱われている。ところが、【護】では偈を発する際は、その直前で「以頌讚曰」「以偈讚曰」「頌曰」などといったかたちで明示されるのに対して、最後の童子の発言直前にそのような文言は確認できない。これらのことから最後の童子の発言も本来は偈頌の形式ではなかった可能性が高い。

27 蔵訳では2人の童子の答えが終わるとすぐに最初の童子が答えているが、漢訳諸本それぞれでは次のように、2人の童子がもう1人の童子に何を願うのかについて質問を投げかけている。

【識】「是二兒各各有是願已，復共問一兒：“若願何等？”」

【護】「於時二童謂一童曰：“族姓子！以斯德本欲誓何願？”」

【天】「二童子各説所願已，復問第一童子曰：“汝善開導為我善友，汝獻供養何所求耶？”」

『よきかな、よきかな。善士よ、あなたはその言葉をよく言った。〔あなたは〕デーヴァと世間において存在するものの拠り所になると発心した』

§6 3 童子がやってくるのをご覧になる一切勝如来と海慧比丘

「そこで、舍利弗よ、一切勝如来は随侍していたサーガラブッディ（海慧）²⁸ というものにおっしゃった。

『比丘よ、童子で、真珠の胸の半飾りを携えてやって来るこの三人があなたには見えるか』

〔海慧比丘は〕申し述べた。

『世尊よ、〔私には童子たちがやってくるのが〕見えます』

世尊（＝一切勝如来）はおっしゃった。

『比丘よ、真ん中にいてやって来るこの童子は次のような考えをもってやって来る。すなわち、足のあげることとさげることすべてにおいて、転輪聖王になりうる幾百千の善根を獲得する。同じように、シャクラ（帝釈天）となること、ブラフマー（梵天）となること、幾百千の〔善根を〕獲得する。²⁹ すべての歩みにおいて、幾百千の仏を目の当たりにする善根を獲得する』

28 *blo gros rgya mtsho*: *Sāgarabuddhi. 【識】「沙竭」「沙竭勃」【護】「海意」【天】「海慧」【識】にみえる「沙竭勃」からここでの原語は *Sāgarabuddhi である可能性が高い。一方、第 I 章で登場した菩薩のひとりに、同じく *blo gros rgya mtsho* とするものがみえるが、そちらでは【識】は「沙竭末」となっているので、その原語は *Sāgaramati である可能性が高い。拙著 [2012: 70-71] では、第 I 章にみえる菩薩の固有名とこの箇所の子の固有名をともに *Sāgaramati と比定して、第 I 章と第 IV 章の間にみられる登場人物の固有名に関する矛盾点としたけれども、上記のように訂正する。なお、【護】では、この比丘に関しては「博聞最尊」という説明句がみえる。

29 蔵訳と【天】では「転輪聖王」「シャクラ」「ブラフマー」の 3 者になることが挙げられるが、【識】【護】では、それらに加えて「百劫の罪を消す」ということも説かれている。

§7 3 童子による一切勝如来への供養³⁰

「舍利弗よ、そこで、三人の童子は一切勝世尊・如来のところへ向かい、近づくと、世尊の足に頭でもって敬礼してから、その真珠の胸の半飾りを世尊のお体に散らした。舍利弗よ、その時、声聞になる思いを持ったものによって真珠の胸の半飾りが散らされ、それらは彼の如来の両肩に掛かった³¹。その童子によって一切智者になる思いをもって真珠の胸の半飾りが散らされ、それが彼の如来の頭上において、真珠の胸の半飾りでできた多種多様の楼閣 (*kūṭāhāra) があらわれたならば、妙麗で、四角に (*caturasra) 四本の柱が立てられて、荘厳され、その高樓 (*kūṭāgāra) の中には如来のお体が結跏趺坐してお座りに³²なっているのもみえた」

【識】「拳其一足時、却其罪百劫。如下一足、後事事当更百遮迦越羅如是数」

【護】「一歩中、超越百劫終始之患。其一举足功德之本、當更百臨轉輪聖王」

細かく見ると、【識】では足を挙げることと下ろすことそれぞれに功德を割りふっているが、【護】では蔵訳同様それらを区別しない。

30 この一節に含まれる表現と類似したものが、以下のように、*Saddharmapuṇḍarīka* 第 XXV 章にみえる。*Saddharmapuṇḍarīka* にみえる記述の方が概ね詳細になっている。

atha khalu sa rājā Śubhavyūhaḥ sā ca Vimaladattā rājabhāryā śatasahasramūlyam muktāhāraṃ bhagavata uparyantarīkṣe 'kṣaipsīt / samanantarakṣiptāś ca sa muktāhāras tasya bhagavato mūrdhni muktāhāraḥ kūṭāgāraḥ samsthito 'bhūc caturasraścātuṣṭhūṇaḥ samabhāgaḥ suvibhakto darśanīyaḥ / tasmimś ca kūṭāgāre paryaṅkaḥ prādurbhūto 'nekadūṣyaśatasahasrasamstṛtaḥ / tasmimś ca paryaṅke tathāgatavigrahaḥ paryaṅka-baddham samdṛśyate sma / (SP p. 468, ll. 5-10)

「それからかの王シユバヴューハとかの王妃ヴィマラダッターとは、幾百・千(金)に値する真珠の首飾りを、世尊の頭上高く中空に投げかけた。その真珠の首飾りが投げかけられるやいなや、真珠の首飾りはかの世尊の頭上で、四角形で四本の柱があり、各部分が均等でよく均整のとれた、華麗な楼閣となった。その楼閣のなかに幾百・千もの多くの美しい布が重ねられた台座があらわれ、その台座の上に結跏趺坐した如来の姿が見られた」(松壽他 [1981: 243] 参照)

これに類する記述が DKP §9A (T No. 624 15.360c17-22; T No. 625 15.379c29-380a6) や『転女身経』(T No. 564 14.919c) などにも確認できる。

31 【天】のみ「所献瓔珞住於仏前」(献じられた首飾りは仏の前に置かれた)と造る。

32 *skyl mo krung bcas shing bzhugs*: *nyaśīdat paryaṅkam ā√bhuj (MVy 6283 参照)

ただし、【識】【護】では「結跏趺坐」という言葉はみえず、ともに「腰掛」(「床」「床座」)があって、そこに如来が座っていたとする。注 30 で言及した *Saddharma-*

§8 一切勝如来による微笑

「そこで、彼の如来は微笑³³まれた。すなわち、ならわしとして、諸仏・世尊が微笑みなさったそのときに、数多くの種類の色の光が如来のお口からあらわれた。すなわち、青 (*nīla)、黄 (*pīta)、赤 (*lohita)、白 (*avadāta)、³⁵緑、水晶 (*sphatika) と銀 (*rajata) といった色である。それらの光によって

punḍarīka に見える記述には「腰掛 (paryāṅka)」と「結跏趺坐 (paryāṅkabaddha)」の両方がみえる。

33 「微笑まれた」より後の部分は、よく知られているように「仏の微笑」という定型的表現として仏典に頻繁に登場する。ここでは *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* にみられる用例を掲げる。

atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ smitaṃ prādurakarot / dharmatā khalu punar eṣāṃ buddhānāṃ bhagavatām - yadā smitaṃ prāduṣkurvanti, atha tadā nānāvārṇā anekavarṇā raśmayo bhagavato mukhadvārān niścaraṅti - tadyathā nīlapītalohitāvadāt amāñjiṣṭhasphaṭikarajatasuvarṇavarṇāḥ / te niścarya anantāparyantān lokadhātūn ābhayā avabhāsyā yāvad brahmalokam abhyudgamaṃ punar eva pratyudāvṛṭya bhagavantaṃ triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavato mūrdhany antardhīyante // (AsP Ch. XXVIII, p. 226, ll. 10-14.)

「すると、そのとき、世尊は微笑をお示しになった。ところで、以下が微笑を示されるさいの諸仏世尊のならないのである。すなわち、そのとき、種々の色彩、多様な色彩、たとえば青色、黄色、赤色、白色、茜色、透明、銀色、金色の光線が世尊の口から放たれるのである。放たれると、それら〔の光線〕は光輝によって、限りなくもはてしない諸々の世界を照らし出し、ブラフマー神の世界にまで昇って行って、また帰ってきて、世尊のまわりを三たび右回りにめぐり、世尊の頭頂のなかに消え去るのである」(梶山他 [1980: 281])

上記のような「微笑にともなう光」に関する表現は【識】【護】には確認できない。これは拙著 [2012: 48ff] でも論じたように、〈阿闍世王経〉諸本が大きく2種の系統に分かれることを示唆する相違点のひとつである。一方、本経の第XII章では阿闍世王の太子チャンドラシュリー(月首)に授記する際に釈尊が微笑む場面が現れるが、ここでは【識】【護】ともに、「微笑にともなう光」に関する表現が確認できる。これらの相違点に関しては本稿の導入でも述べたように、第IV章に関する編纂事情が反映した可能性が考えられる。拙著 [2012: 71-72] 参照。

34 先に掲げた AsP の用例にも見えるようにここで「ならわしとして」と訳出した言葉は *dharmatā と比定される。dharmatā は通常「法性」と訳出されることが多いが、上掲の梶山他による AsP の翻訳や BHSD s.v.での解説を参照して、ここでは「ならわしとして」と訳出する。

35 Ph のみにみえる *ljang khu* という読みを取る。他のカンギュル諸資料がとる *ja gong* では意味が通らない。一方、上記の AsP での用例および BHSD の *mañjiṣṭha* の項目

世間は際限のなく遍満され、〔それらの光は〕ブラフマー世界の中に至って、太陽と月の光によって遮られると、ふたたび戻ってきて、世尊の周りを三度廻ってから、世尊の頭頂に消えていった。

そこで、彼の世尊に対して、世尊に随侍する海慧比丘は尋ねた。

『如来は理由なく、原因なく、微笑まれないならば、世尊よ、いかなる理由で、いかなる原因で微笑まれたのか³⁶』

とそのように〔海慧比丘が〕申し述べると、世尊は彼の随侍するもの（=海慧比丘）に対して次のようにおっしゃった。

『比丘よ、この2人の童子が声聞になる思いをもって真珠の胸の半飾り二つを如来に対して散らしたのを汝は見たか』

〔海慧比丘は〕申し述べた。

『世尊よ、〔私は〕見ました』

世尊（=一切勝如来）はおっしゃった。

『比丘よ、この2人の童子は輪廻をおそれているので、さとりにへの誓願を發せず、“私たちは直ちに涅槃に入るべきだ”とそのように考えた。比丘よ、あなたに対して教誨する。〔次のように〕了解すべきである。この三人目の童子が無上正等覚を悟るであろうそのときに、この2人

(BHSD p. 414) を参照すれば、定型表現に現れる色の順番としてはここに *mañjiṣṭha* (*bīshod*; 茜色) に類する言葉が来ると予想できる。けれども、仏の微笑に関する定型表現には揺れもあって必ずしも一様ではなく、どのような言葉がここに配されていたのかは想定が難しい。

36 この文言も先の「世尊の微笑」に連なる定型的表現である。ここでも先に引用した *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* における用例に続く部分を掲げる。

nāhetukaṃ nāpratyaṃ tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ smitaṃ prāduṣkurvanti / ko bhagavan hetuḥ, kaḥ pratyaṃ smitasya prāduṣkaraṇāya? (AsP Ch. XXVII, p. 226, ll. 16-18)

「供養されるべき、完全なさとりを得た如来は、理由もなく、いわれもなく微笑をお示しにはならないものです。世尊よ、〔世尊がいま〕微笑を浮かべられた理由は何でしょうか、いわれは何でしょうか」(梶山他 [1980 : 281])

一方、本経第XII章で世尊が微笑する場面では形式がやや異なり、世尊が微笑し光をあらわした因縁について、阿難が偈頌をもって尋ねる形式となっている。

の童子は、彼〔の仏〕の声聞として優れたものとなるであろう。すなわち、一人は智慧をそなえることに優れ、二人目は神通をそなえることに優れたものとなるであろう』』

§9 釈尊と舍利弗、目犍連の前生

「舍利弗³⁷よ、その時、童子で中央にあつて、一切智者〔性〕³⁸にむけて発心した彼は別人であると思ひ、疑ひ、あるいは怪しんで、舍利弗よ、そのように考えてはいけない。それはどうしてかという、私 (= 釈尊) がその時に中央にいたその童子であつた。舍利弗よ、その時に右側の童子であつた彼を別人であると思つて、そのように考えてはいけない。それはどうしてかという、舍利弗よ、あなたこそが、その時の、その童子であつた。比丘よ、目犍連が〔その時の〕左側の童子であつた」

§10 一切智者を目指すことの優位性

「舍利弗よ、見よ。善根は等しいけれども、あなたたち2人は輪廻を恐れるが故に、さとりにむけて発心していない。³⁹すなわち、恐れ的心によって、何とかして『私たちは直ちに涅槃に入るべきである』と考えるけれども、あなたたち2人によって私を超えることはできない。舍利弗よ、見よ。私が一切智者〔性〕に至つてから、あなたたち2人は私が説法することで解脱する。舍利弗よ、その法門によつても次のように知られるべきである。すなわち、何とかして直ちに涅槃に入ることを望むならば、一切智者

37 【識】をのぞく漢訳諸本では、藏訳同様、釈尊による発言が続くが、【識】のみ、舍利弗と釈尊の間で問答が交わされる形式となっている。すなわち、【識】では釈尊が「中央の童子が誰か分かるか」という質問を投げかけ、それに舍利弗が「わかりません」と答えたのちにその正体を明かす、という形式となっている。

38 注11同様、*thams cad mkhyen pa* という語がみえるが、ここでも「一切智者性」(**sarvajñātā*/ **sarvajñatva*)を原語と想定して上記のように訳出する。また、次節以降でも文脈上、そのように想定するほうが適当である場合にはそのように補って訳出する。

39 【識】では「不発菩薩心」とする。

〔性〕にむけて発心すべきである。それはどうしてかということ、舍利弗よ、『素早い乗り物』というものは一切智者（一切智者性⁴⁰）の形容句（*adhivacana⁴¹）である。『欺かない乗り物』というもの、『一切衆生に利益と安楽〔をもたらず〕乗り物』というもの、『輝ける乗り物』というもの、『乗り物で優れたもの』というもの、『乗り物で最高のもの』というもの、『乗り物で最上のもの』というもの、『無上の乗り物』というもの、『汚れのない乗り物』というもの、『あらゆる声聞と独覚を圧倒する乗り物』⁴²というものは、舍利弗よ、一切智者（一切智者性）の形容句である」

以上の前生譚（*pūrvabhūtakathā）と、以上の一切智者（一切智者性）の教説が説かれたとき⁴³、一万の命あるものが無上正等覚にむけて発心した。

§11 大声聞たちの嘆き

舍利弗と大目犍連、大迦葉、レーヴァタ、ア Nilダッタ、優波離、富楼

40 本節のこの箇所以降、3度みられる *thams cad mkhyen pa* に関しては、「一切智者」（*sarvajña）か「一切智者性」（*sarvajñātā/*sarvajñatva）かは文脈等からは推定することは難しい。ここでは丸括弧を用いて両方の案を示しておく。注 11 参照。

41 蔵訳では、以下の部分はすべて「乗り物」（*yāna）と関連した説明になっているが、【識】では *yāna に相当する語はみられない。【護】では「其乗第一」「無罣礙乗」「諸通慧乗」などの語がみえる。なお、【天】ではこの「一切智（者）」に関する一連の記述は欠けている。

42 *nyan thos dang rang sangs rgyas tham cad zil gyis gnon pa'i theg pa*: *sarvaśrāvaka-pratyekabuddhābhībhāvanayāna (MVy 852)

43 この部分の表現をめぐって各訳間で多少の相違が見受けられる。すなわち【識】では、以下のように造る。

【識】「説摩訶衍品（*mahāyānaparivarta）時」

【護】「仏時説斯大乘法典（*mahāyāna-sūtra/-parivarta）」

それらに対して、【天】では本節末尾の部分に次節の末尾に回して、以下のように、蔵訳とほぼ同様に造る。

【天】「聞仏説本事因縁、及聞舍利子説是語已」

上記よりわかるように蔵訳にはみられない文言が【識】【護】には含まれていて、これらは第四章の編纂事情と関連したものと推測される。拙著 [2012: 71] 参照。

那などの彼らすべての大声聞⁴⁴は世尊の足に敬礼すると、声をひとつにして言った。

「世尊よ、善男子と善女人は恭敬することをなすべきでしょう。すなわち、善根を植えることをなすべきでしょう。優れたものに対しても敬うことをなすべきでしょう。優れた誓願をもたてることをなすべきでしょう。それはどうしてかという、世尊よ、私たち〔声聞〕に対して百千の仏が一切智者を含んだ話を説きつつ私たちに法を説いても、世尊よ、私たちは無碍の智を得るであろう分限をそなえていません。世尊よ、私たちは五無間業⁴⁵をそなえるならばよいけれども、無上正等覺より離れるであろうものは、そのようではありません。それはどうしてかという、世尊よ、私たちは五無間業をそなえても、地獄(*naraka)において苦痛を消し去り、一切智者の無碍なるこの智より離

44 挙げられる大声聞は各訳で相違する。漢訳諸本では以下のとおり。

【識】「舍利弗、摩訶目犍連、阿難、舍比、摩訶迦葉、鬘越(*Revata)、難頭、耶和致、難離、分耨頭陀、須菩提」

【護】「舍利弗、大目犍連、大迦葉、離越(*Revata)、阿難、律怱利、分耨文陀尼子、尊者須菩提」

【天】「舍利子、大目乾連、大迦葉、阿泥盧駄、優波離、富樓那、須菩提」

蔵訳にはみられないものには下線を施した。蔵訳には見当たらない「須菩提」が漢訳諸本ではそろって言及される。また、【識】と【護】ではともに「阿難」に言及する。【識】に関しては特に難解で、定方[1989:68]および村上[1994:286]を参照したが、特に「舍比」「難頭、耶和致、難離」(vr:「難頭、耶和離」)に関してははっきりしない。村上[1994]では「舍比(*Sabhya)」「難頭(*Nanda)」「耶和致(離)(*Upāli)」「難離(*Aniruddha)」と比定している。

一方、「摩訶迦葉」についてはいずれの諸本でも確認できるが、後続の第IX章で摩訶迦葉が登場した際に、摩訶迦葉は釈尊の会座にはおらず、異なる場所にいたことが前提となる記述となっている。この矛盾点は、本来は独立単行典籍であったと推測される第IV章の大部分と第V章以降を結びつける役割を担う本節が後から付加されたことを示唆していると訳者は考える。拙著[2012:74]参照。

45 *mtshams ma mchis pa lnga*: *pañca-ānantarya. 【識】「五逆悪」【護】「五逆罪」【天】(欠)

具体的には「母殺し」(mātrghāta)、「父殺し」(pitrgḥāta)、「阿羅漢殺し」(arhat-ghāta)、「破僧伽」(samghabheda)、「(悪心)出仏身血」(tathāgatasyāntike duṣṭacittāruddhiropādāna)である(MVy 2324-2328 参照)。

れないということならば、⁴⁶世尊よ、我々〔声聞〕は焼かれた心相續を持ち、衰えた感官を持ち、一切智者の智の器でなくなってしまうならば、⁴⁷今やどのようにすべきでしょうか。世尊よ、すなわち、たとえば、人が死んで、時が過ぎてしまったならば、親族らにとっての頼るべきものではなくります。⁴⁸まさにそのように、世尊よ、声聞乗を信じるならば、デーヴァと世間に含まれたものに利益をもたらしません。世尊よ、すなわち、例えば、この大地は二本足を持ったものと四本足

46 五無間業と大声聞を対比させる言説は *Vimalakīrtinirdeśa* Ch. VII, §4-5 や *Śūraṅgamasamādhi* にもみられる。拙著 [2012: 73] 参照。

47 *thams cad mkhyen pa'i ye shes kyi snod ma lags par gyur na/* 【識】「其器者以不堪菩薩心」【護】「於茲仏慧、無罣礙智非是仏器」

声聞や阿羅漢を「器」(*bhājana/*pātra) でない、とする記述はいくつかの〈文殊系経典〉で共通してみられる。特に *Śūraṅgamasamādhi* では、以下のように、本経と同様「五無間業」と対比するようなかたちで説かれることは注目に値する。

「所以者何？五逆罪人聞是首楞嚴三昧、發阿耨多羅三藐三菩提心已、雖本罪緣墮在地獄、聞是三昧善根因緣、還得作佛。世尊！漏尽阿羅漢猶如破器、永不堪任受是三昧」(T. No. 624 15.643a7-10)

de ci'i slad du zhe na/ bcom ldan 'das mtshams ma mchis pa lnga dang ldan pas ni dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di thos nas bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu sems kyang bskyed la/ des sngon sdig pa'i las bgyis pas ni sems can dmyal bar yang mchi mod kyi/ 'on kyang dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin gyi nang du yang chud par mchi'o// dgra bcom pa zag pa zad pa shin tu bsblabs pa snod du ma gyur pas dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin la ci zhig bgyir mchis te/ (D No. 132, mdo sde Da 303a4-6)

同経ではこの後「完器と破器」の比喩が説かれ、声聞と辟支仏は利他行を行えない「破器」である、とされる。他に「阿羅漢や声聞は器でない」とする記述が見られるものとして、『入法界体性経』(T. No. 355 12.236a2125; D No. 118, mdo sde Ja 286a7-b1) 『文殊師利授記経』(T. No. 310 11.341b3-7; T. No. 319 11.907b21-28; D No. 59, dkon brtsegs Ga 265b6-266a1) 『大方広宝篋経』(T. No. 462 14.466b16ff; T. No. 461 14.452b23ff; D No. 117, mdo sde Ja 248a6ff) などが挙げられる。これらは文殊が主要登場人物として活躍する、いわゆる〈文殊系経典〉であるが、管見の限り、それら以外の典籍では、阿羅漢や声聞、辟支仏などを「器でない」とする記述はそれほど頻出しないようである。

48 蔵訳では以下の文章は丁寧表現にはなっていないものの、この部分より前の部分との統一を図って丁寧表現で訳出する。

をもったものたちに利益⁴⁹をもたらすものです。まさにそのように、世尊よ、無上正等覚にむけて発心したところのその者たちは、デーヴァを含んだ世間に利益をもたらすものです」

(大谷大学任期制助教 仏教学)

〈キーワード〉 普超三昧経、支婁迦讖、竺法護

49 【護】では「一切群萌二足四足若多足」とし、藏訳と類似する。

表 1 〈阿闍世王経〉 第四章 漢訳・蔵訳諸本対照表

| | T. 626 | T. 627 | T. 628 | B | Ba | Bth | D | G | J | L | N | P | Ph | S | T | U |
|-----|---------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|------------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|--------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| §1 | 394c2 | 413b19 | 435c4 | 299a8 | 103b5 | 68a3 | 230a1 | 18a9 | 254a3 | 299a5 | 368a6 | 240b5 | 33a3(-8) | 292b5 | 272b1 | 262a3 |
| §2 | 394c12 | 413c7 | 435c21 | 299b8 | 104a6 | 68a8 | 230a6 | 18b6 | 254b1 | 299b4 | 368b7 | 241a2 | (33b-34a: omit) | 293a5 | 273a1 | 263a3 |
| §3 | 394c17 | 413c13 | 436a1 | 300a3 | 104b6 | 68b3 | 230b1 | 18b9 | 254b4 | 300a1 | 369a4 | 241a5 | | 293b1 | 273a5 | 263a7 |
| §4 | 394c26 | 413c29 | 436a14 | 300b3 | 105a4 | 68b9 | 230b6 | 19a6-9 | 255a2 | 300b1 | 369b5 | 241b3 | (34b1) | 294a1 | 273b4 | 263b5 |
| §5 | 395a1 | 414a8 | 436a22 | 300b6 | 105a7 | 69a2 | 231a2 | 14b4 | 255a5 | 300b4 | 370a2 | 241b6 | 34b2 | 294a4 | 273b7 | 263b8 |
| §6 | 395a8 | 414a23 | 436b6 | 301a3 | 105b6 | 69a6-8; 74a8- | 231a5 | 14b9; 15b9- | 255b1 | 301a2 | 370b3 | 242a2 | 34b8 | 294b2 | 274a4 | 264a6 |
| §7 | 395a14 | 414b2 | 436b12 | 301a7 | 106a3 | 74a8 | 231b1 | 16a2 | 255b4 | 301a6 | 370b5 | 242a5 | 35a4 | 294b6 | 274a8 | 264b1 |
| §8 | 395a19 | 414b7 | 436b18 | 301b3 | 106a7 | 74b2 | 231b3 | 16a6 | 255b7 | 301b3 | 371a3 | 242b1 | 35b1 | 295a3 | 274b4 | 264b5 |
| §9 | 395a25 | 414b14 | 436c5 | 302a4 | 107a3 | 74b9 | 232a3 | 16b4 | 256a7 | 302a5 | 371b6 | 243a1 | 36a3 | 295b4 | 275a6 | 265a6 |
| §10 | 395a29 | 414b16 | 436c7 | 302a7 | 107a6 | 75a3-7; 69a8 | 232a5 | 16b7-8; 19a9- | 256b1 | 302a8 | 372a2 | 243a3 | 36a5 | 295b7 | 275b1 | 265b1 |
| §11 | 395b10 -22 | 414b28 -16 | 436c11 -29 | 302b6- 303a8 | 107b6 -108b1 | 69a9- b6 | 232b2- 233a1 | 19b4- 20a4 | 256b7- 257b7 | 301b8- 303b3 | 372b2- 273a6 | 243a8- 244a1 | 36b5- 37a8 | 296a6- 297a2 | 275b7- 276b1 | 253b8- 266b2 |

